主日礼拝説教 「戻ってくる」 予稿

日本基督教団石神井教会　2026年11月8日

【旧約聖書日課】創世記　18章1～15節

1主はマムレの樫の木の所でアブラハムに現れた。暑い真昼に、アブラハムは
天幕の入り口に座っていた。2目を上げて見ると、三人の人が彼に向かって立っ
ていた。アブラハムはすぐに天幕の入り口から走り出て迎え、地にひれ伏して、
3言った。

「お客様、よろしければ、どうか、僕のもとを通り過ぎないでください。4水
を少々持って来させますから、足を洗って、木陰でどうぞひと休みなさってくだ
さい。5何か召し上がるものを調えますので、疲れをいやしてから、お出かけく
ださい。せっかく、僕の所の近くをお通りになったのですから。」

その人たちは言った。

「では、お言葉どおりにしましょう。」

6アブラハムは急いで天幕に戻り、サラのところに来て言った。

「早く、上等の小麦粉を三セアほどこねて、パン菓子をこしらえなさい。」

7アブラハムは牛の群れのところへ走って行き、柔らかくておいしそうな子牛
を選び、召し使いに渡し、急いで料理させた。8アブラハムは、凝乳、乳、出来
立ての子牛の料理などを運び、彼らの前に並べた。そして、彼らが木陰で食事を
している間、そばに立って給仕をした。

9彼らはアブラハムに尋ねた。

「あなたの妻のサラはどこにいますか。」

「はい、天幕の中におります」とアブラハムが答えると、10彼らの一人が言っ
た。

「わたしは来年の今ごろ、必ずここにまた来ますが、そのころには、あなたの
妻のサラに男の子が生まれているでしょう。」サラは、すぐ後ろの天幕の入り口
で聞いていた。11アブラハムもサラも多くの日を重ねて老人になっており、しか
もサラは月のものがとうになくなっていた。12サラはひそかに笑った。自分は年
をとり、もはや楽しみがあるはずもなし、主人も年老いているのに、と思ったの
である。

13主はアブラハムに言われた。

「なぜサラは笑ったのか。なぜ年をとった自分に子供が生まれるはずがないと
思ったのだ。14主に不可能なことがあろうか。来年の今ごろ、わたしはここに戻
ってくる。そのころ、サラには必ず男の子が生まれている。」15サラは恐ろしく
なり、打ち消して言った。「わたしは笑いませんでした。」主は言われた。「い
や、あなたは確かに笑った。」

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙　9章1～9節

1わたしはキリストに結ばれた者として真実を語り、偽りは言わない。わたしの良心も聖霊によって証ししていることですが、2わたしには深い悲しみがあり、わたしの心には絶え間ない痛みがあります。3わたし自身、兄弟たち、つまり肉による同胞のためならば、キリストから離され、神から見捨てられた者となってもよいとさえ思っています。4彼らはイスラエルの民です。神の子としての身分、栄光、契約、律法、礼拝、約束は彼らのものです。5先祖たちも彼らのものであり、肉によればキリストも彼らから出られたのです。キリストは、万物の上におられる、永遠にほめたたえられる神、アーメン。

6ところで、神の言葉は決して効力を失ったわけではありません。イスラエルから出た者が皆、イスラエル人ということにはならず、7また、アブラハムの子孫だからといって、皆がその子供ということにはならない。かえって、「イサクから生まれる者が、あなたの子孫と呼ばれる。」8すなわち、肉による子供が神の子供なのではなく、約束に従って生まれる子供が、子孫と見なされるのです。9約束の言葉は、「来年の今ごろに、わたしは来る。そして、サラには男の子が生まれる」というものでした。

「また来ます」【こども説教のために】

日曜日の礼拝が終わった後、「また来ます」と言って帰っていく人がいます。「お待ちしています」と言って送り出しますが、少し複雑な気持ちにもなります。日曜日の教会に来るのが当たり前の人は「また来ます」とは言わないからです。だから、わたしは皆さんのことを心の中では「行ってらっしゃい」と送り出しています。いつでも「ただいま」と帰ってきてほしいからです。

アブラハムが三人の人を迎えたときのことです。三人は、見知らぬ旅人でしたが、アブラハムは「**お客様**」と呼びかけて迎え、木陰でもてなしました。歩き疲れた足を洗って差し上げ、豪勢な食事を用意し、自分は給仕役となりました。迎えた三人の人に、自分の家にいるように居心地よく過ごしてもらい、また来てもらいたいと思ったのでしょう。それは、うまくいったようです。彼らの一人に「**必ずここにまた来ます**」と言ってもらえたのです。

その人は、「**来年の今ごろ**」と言いました。そのころに、アブラハムの家族が増えているはずだからです。アブラハムも妻のサラも、まだそのことを知りませんでした。「**男の子が生まれているでしょう**」と言われても、信じられませんでした。サラは、「そんなはずがない」と思って、ひそかに笑ってしまいました。けれども、その人たちは、重ねて言いました、「**来年の今ごろ、わたしはここに戻ってくる**」と。

その人たちは、「この家に帰ってくる」と言ったのです。アブラハムの家族を自分の家族のように思って、家族の喜びの日には帰ってくる、と言ってくれたのです。その日には、きっと、皆で喜び笑うことになるのでしょう。

「お客さまは神さまです」

今年も再来週のオープンチャーチに向けて、奉仕者の皆さんが準備を進めてくださっています。教会は敷居が高いと思われている周囲の方々に、わたしたちの教会が地域に開かれた場所であることを知っていただこうと、10 年前に始めた行事です。コロナ禍でしばらく中断しましたが、今回が 6 回目の開催です。教会の皆さんの中には、普段どこかお客さま気分で礼拝においでになられている方もあるかもしれませんが、その日ばかりは、来堂くださる方々をホストとして迎える役割を担っていただくことになります。

もちろん、普段から、そうしていただきたいのです。教会は、オープンチャーチの日だけ「お客さま」を迎えるわけではないからです。教会は、いつでも、だれにでも開かれています。日曜日に限らず、いろいろな方が訪ねて来られます。あらかじめお問い合わせくださってから来られる方もありますが、飛び込みで来られる方も少なくありません。そのような方のことを、いつでも牧師や役員方が対応できるわけではありません。

幸い、最近は多くの皆さんが、はじめて来られた方を歓迎してコーヒータイムにお誘いくださっているようです。そのとき大切なことは、一人で引き受けないことです。教会に来てくださった「お客さま」は、わたしたちの「お客さま」だからです。家族で客を迎えるときには、まず一人ひとりに紹介して、その家のどこにいても居心地が悪くならないようにしていただくものでしょう。教会は「神の家」で、わたしたちは「神の家族」です。「神の家」にお迎えした「お客さま」は、まずはじめに、できるだけ「神の家族」の一人ひとりに紹介して、できる限りどこにいても居心地が悪くないようにして差し上げたいのです。

「いいや、教会に来られる人は神を礼拝しに来ているのだから、人の紹介などしなくてよい」とお考えの方もあるかもしれません。確かにそうです。互いに「神の家族」として知る者同士が、神の御前に進み出ることをお座なりにして、お互いの挨拶や噂話に忙しくしているようなことがあるならば、改めなければいけません。

けれども、アブラハムの迎えた三人の客の一人が実は「**主**」であった、というようなことがあるのです。「お客さまは神さま」だったのです。主イエスも、知らずに迎えた旅人にしたようなことは、「**わたしにしてくれたことなのである**」（マタイ 25:40）とおっしゃられました。

アブラハムは、三人の人を迎えて、食事のもてなしをしました。そのとき、妻のサラにはパン菓子を用意させましたが、「**あなたの妻サラはどこにいますか**」と尋ねられるまで紹介しませんでした。そう問われて初めて、そこにいる人が「**主**」であると、アブラハムは気づかされたのです。

生まれているでしょう

「お客さま」を迎えるとき、わたしたちは、知らずに主をお迎えしています。いいえ、主をお迎えすることと「お客さま」をお迎えすることは、一つなのでしょう。わたしたちが教会に集まり、礼拝にあずかるのは、神の御前に立たせていただく者として、主なる神をわたしたち自身の内にお迎えさせていただくためです。その神がわたしたちと共にいるようにと招き集めてくださっている一人ひとりのことを、わたしたちがお迎えしないようなことがあるとすれば、それは、主なる神をお迎えしていないのと同じなのです。

もちろん、「お客さま」たちの多くは、遅かれ早かれそれぞれの「家」に帰って行かれます。自分の「家」で「家族」としての責任を負われている方であれば、お帰りが待たれているはずです。「神の家」でなく「人の家」であったとしても、同じです。わたしたちが長く引き留めるわけにはいきません。けれども、中には、「**また来ます**」とおっしゃってくださる方もあるでしょう。

わたしたちは、そのような方を、次においでのときにも「お客さま」としてお迎えいたします。主をお迎えするように、お迎えいたします。わたしたちの「神の家」の「神の家族」たちの間で、できるだけ居心地よく過ごしていただけるように、皆でお迎えいたしましょう。

「二回目からは、お客さま扱いしません」というようなケチなことは申しません。何度でも、「お客さま」としてお迎えいたします。望まれればいつまでも、「お客さま」としてわたしたち「神の家族」の「家」にお迎えいたしましょう。

ただ、わたしたちは、一つの期待を持っています。「**また来ます**」と言ってくださる「お客さま」が、いつか、わたしたち「神の家」の「家族」の一人となってくださるときが来ることを。

アブラハムが迎えた「お客さま」は、「**また来ます**」、「**ここに戻ってくる**」と、重ねて言われました。それは、「**男の子が生まれている**」頃のことだと言われました。アブラハムの家に新しく子が生まれるとき、その人は、また来る、戻ってくる、と言われたのです。

その「お客さま」が、アブラハムの天幕にまた来たのか、『聖書』の物語は、何も語っていません。けれども、約束の子は生まれました。アブラハムの家は、その子を迎え入れました。家族として迎え入れました。それが、あの「お客さま」の「**また来ます**」の意味だったのかもしれません。

わたしたちは、「お客さま」をお迎えします。わたしたちの「神の家族」の間にお迎えして、お帰りのときには「また来ます」と言っていただけるように心を尽くします。追いかけずとも再びおいでくださるとき、いつか、その方が、わたしたちの「家族」の新しい子となってくださると期待して。